

1 「戦後の昭和」とはどんな時代だったか



町田 忍
MACHIDA Shinobu

エッセイスト/庶民文化研究家

昭和20年に第二次世界大戦が終わり昭和30年代に入ると、人々の生活は急速に向上していった。道路や住宅が整備され、誰もが最新の家電を手にし、新たな職業を生み出した。戦後昭和における人々の生活はどのように変化し、何に幸福を感じていたのだろうか。

庶民が主役の昭和

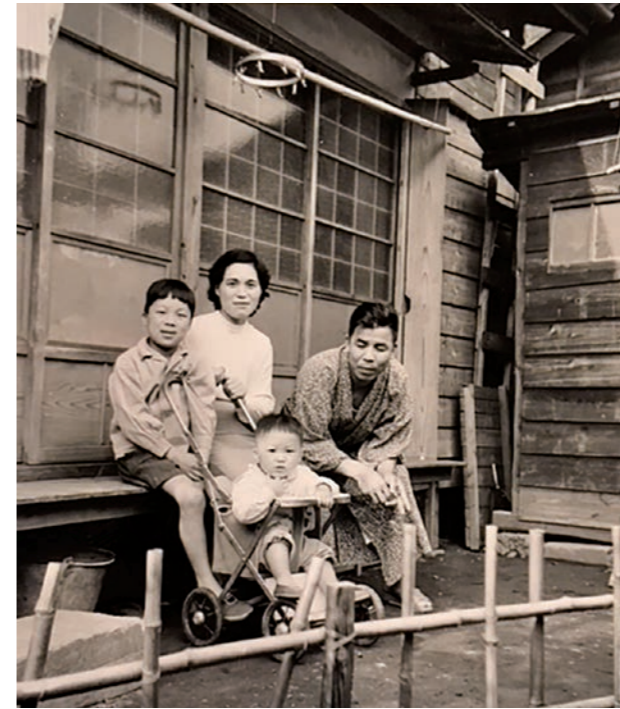
戦後、それも特に昭和30年代を中心とする時代が最近注目されている。「昭和30年代ブーム」とマスコミは紹介しているが、どうやらこの現象は単なる懐古趣味からのブームではなさそうである。事実、昭和30年代をテーマとした施設が40年ほど前から全国各地に出現していることから理解できる。実

はこの時期、それまで各地にあった、いわば老舗的遊園地の閉園の頃と一致している。要因としては、娯楽施設の多様化、東京ディズニーランドのような巨大テーマパークの出現などが考えられる。

さて、そんな昭和30年代について考えてみると、戦後の復興期を経て、高度経済成長期に入るまでの物質的に恵まれてきた時代と言えるのではない



昭和28年の我が家



昭和32年当時の我が家と家族。左が私



私の生まれた家の台所(昭和28年再現ジオラマ)

とても庶民には手のとどかない商品であった。当然のことながら放送開始日の全国の受像機はわずか868台でしかなかった。当時の新聞記事によると「早くもテレビ劇場が出現」として「30円(現在の500円ほど)の入場料でテレビを見せる商売がはじまった」と報じている。NHKと日本テレビによる初のプロレス中継の際には、東京、新橋、新宿などの繁華街にわずか20インチ程度の街頭テレビがそれぞれ数台置かれ、周囲には1万人以上の観客が集まった。

それからわずか5年後の昭和33年、オート三輪に積まれたビクターのテレビが我が家にやってきた。早速4畳半の居間に置かれ、コブラン織りのカーテン、上に室内アンテナが乗せられた。このときのテレビ価格は6万円ほど、現在の約100万円はした。

その頃、電気冷蔵庫や掃除機など続々と家電製品が揃った。父は冷蔵庫で冷えたビールを飲みながらプロレスや相撲、野球などをよく見ていた。そんな父はたいそう偉く見えた。もちろんわたしも『チロリン村とくるみの木』『月光仮面』などが楽しみだった。テレビが家になかった頃は、近所のテレビのある家にかくさんの人が集まり見せてもらっていた。当時テレビをいち早く買った家は、近所の人たちに見せてあげるのが普通のことであった。

実はこの頃、通信面でも変化があった。我が家は昭和39年に「電話」を引いた。電話のない頃の急用時は、近所の布団屋さんに電話を借りに行った。我が家宛の電話がきたときは、呼び出し電話というかたちで布団屋さんが知らせに来てくれた。

か。すなわち、昭和30年代の10年に満たない短期間に庶民生活が急激に変化した時代であったと言っても過言ではない。変化という観点では、江戸時代から明治時代に至る、いわゆる幕末維新も同様と思うがそれはあくまで体制の変化であった。明治初期における一般庶民生活を考えてみても、近代化の恩恵を受けるまでにはかなりの時間を要している。

しかし、昭和30年代における「三種の神器」(テレビ・洗濯機・冷蔵庫)はわずか数年の間に全国に普及したのである。この点が明治時代とは異なり、技術革新がすぐに全国一般庶民に還元されたのである。

庶民生活の変化

昭和の生活文化について考えるとき、庶民にとって戦前と戦後では大きく異なる。戦前はいわば、戦争という負の時代でもあった。したがって、良い意味での生活の変化は昭和30年代がキーワードとなっている。さて、そこでわかりやすくするために「テレビ」を例にあげて説明しよう。

日本における一般向けテレビ放送は、昭和28年2月1日にNHKで開始された。このとき、テレビ受像機1台の値段は現在の貨幣価値で500~800万円で、



オート三輪



昭和33年を再現した部屋

稼ぎが増えて、団地には「鍵っ子」なる現象も現れた。

住宅環境の変化

昭和33~36年頃は「岩戸景気」という好景気の時代。所得倍増計画などを背景として、急激な都市開発が行われるようになった。大都市には団地が建ち、都市集中化現象が進んだ。近所にあった原っぱがなくなり、そこには大きなコンクリートの土管が積まれ、それは子供らの遊び場にもなった。実はその土管は我が家の前の道路に埋設される下水道で使うものであった。漫画『ドラえもん』では、原っぱで遊ぶ際によく「土管」が描かれている。

それまでは家庭の雑排水は道路側溝のU字溝に流されていた。トイレは便槽がある「ポットン式」で、私が「汲み取り屋のおじさん」と呼んでいたゲートルに前掛け姿の作業服の人が、定期的排便槽から長い柄のついた柄杓で木桶に糞尿を入れ、担いでどこかに持って行っていた。あとで調べたら、東京湾に投棄されていて、それを魚が食べて循環するエコシステムだった。それも昭和30年代早々にバキュームカーの登場で姿を消した。バキュームカーは掃除機がヒントとなり昭和20年代後半に考え出されたというが、その結果、日本における下水道の普及が遅れたとも言われている。

特に東京においては「昭和39年のオリンピック開催までに都内のインフラ整備を進める」という大きな目標があったため急いで工事が進められた。我が家の前の下水道敷設は昭和38年のことだった。当時、家庭ゴミは家の前の「ゴミ捨て箱」に捨て



赤電話

実にのんびりとした時代だった。また、電話のないときの待ち合わせは「手紙」となる。現在のように遅刻しそうでも携帯電話で連絡が取れないので、うまく会えないこともある。駅などでは「伝言板」があり、そこに書き込んでおいたものだ。極端に言えば、電話のない時代の日常の連絡手段は江戸時代から進歩していなかったということになる。

この時代には女性にとっても大きな変化があった。家電製品の普及で家事が軽減されたのである。結果、女性の社会進出も盛んになった。当時「ビジネスガール (BG)」という言葉が一般化し、やがて「オフィスレディー (OL)」に変化した。共



昭和28年の汲み取り屋のおじさん



現存する大田区の銭湯「明神湯」。昭和の銭湯は宮作りで番台有り

られ不衛生であり、「オリンピックで来日した外国人に良くない印象を与える」ということで、ポリバケツが使われるようになった。

この頃、住宅にも変化がでてきた。戦前に建てられた古い住宅の建て替え時期でもあり、それまでの木造住宅が「モルタル」造りとなり、モルタルアパートが盛んに建てられることになった。手塚治虫などの漫画家らが集まって住んでいた「トキワ荘」もそんなモルタルアパートだった。これらの特徴は、一間でトイレや台所などは共用、風呂はなく銭湯利用となる。ちなみに、都内の銭湯最盛期は昭和43年の約2,600軒で、町内に一軒ほどの割合となる。家庭風呂が普及した現在は約400軒まで減少している。銭湯は情報交換や教育の場でもあり、地域のコミュニティの役割も果たしていた。

そんなモルタル住宅も次第に姿を消しつつあり、現在はプレファブ方式の住宅が多くなっている。かつて住宅を建てる時はカンナで削る音や釘を打つ音が良く聞こえたが、最近は釘もホッチキスのような「バンバン」という音となり、プラモデルを作るような方式となっている。また、高層マンションなども多くなり、街の風景は昭和が終わった頃にはすっかり変貌してしまった。

昭和時代のストックを活かす

ところで、私が子供の昭和30年代、デパートに

行くことは特別の行事だった。両親も目一杯お洒落をして、私は七五三のときの服を着せられた。当時のデパートには一階のエスカレーターにも案内の女性が立っていた。大体は、まず親の買い物に付き合わされる。その後、待ちに待ったおもちゃ売り場へ。食事は大食堂でグラタンとチョコレートパフェを、最後は屋上遊園地という定番コースが楽しみだった。

現在のデパートはというと、一階はテナントが入り、屋上の遊園地はほとんど姿を消し閑散としているのが現状である。しかし唯一活気ある場所がある。そこは地下の食料品売り場だ。何故だろう。私が思うには食料品売り場にはある特徴が見られる。それは多くの店舗が比較的狭い通路に並んでおり、対面販売である点だ。実はこれ、昭和30年代どこにでもあった商店街の雰囲気そのものである。

どんなにコンクリートとガラス張りのビルになろうと、人と人のふれあいの場は必要ではないか。「ストックとフロー」という経済用語がある。ストックは過去に蓄積されたもの、フローは現在の社会を動かす資金やモノの動きとの意味である。昭和の時代にストックされた中に「新しい社会には何が必要か」というヒントが隠されているのではないだろうか。